

# UTIE Instruments Inc.

## Humanities Series

イカサマカジノで実存と工学は接近する

Hiroki Naito

CEO, UTIE Instruments Inc.

### I.

「意識とは何か」という問いは、現代のアカデミズムにおいて最も悪質な時間稼ぎの装置として機能している。ハードプロブレムの周囲には、膨大な論文と、終身雇用を約束されたポストの山が築かれているが、そこで行われているのは地図の作成ですらないかのようだ。彼らは、ピン트가完全に定まるまでは一步も動いてはならないという強迫観念に囚われているか、あるいは動くことの恐怖を厳密さという言葉で粉飾しているに過ぎない。しかし、生物としての我々の時間は有限であり、エントロピーの増大は定義論争の決着を待ってはくれない。我々に必要なのは、足元の暗闇を照らす松明であり、座標を定めるためのコンパスである。「なぜ歩けるのか？」を解剖学的に完全に理解していなくとも、我々は歩くことができる。工学の本質は、この不完全な理解に基づいた、完全な動作にある。このプラグマティズムこそが、現在のアカデミズムが軽蔑し、かつ恐れている野蛮な生命力の正体である。

### II.

特定の個体意識にのみ世界の中心という特権を付与する論理的根拠は乏しい。むしろ、この特権的視座こそが、他者や環境との連続性を遮断する障壁として機能している。自己を何か崇高な必然性の産物だと信じたい欲求は理解できるが、冷徹な確率論の篩にかければ、その妄想は霧散する。テグマーク的な数学的宇宙を前提とするならば、あるいは単純な生物学的多様性の分布を見るならば、「わたし」とは、無限に広がる時空間という巨大な織物の上に、たまたま確率的に刺さった一本の「ピン」に過ぎない。次にこのピンがどこに刺さるかは、誰にも予測できない。それは二十一世紀の日本の中産階級かもしれないし、スラム街の飢えた子供かもしれないし、あるいはイルカや、未来のシリコン基盤の知性かもしれない。この確率論的実存を受け入れたとき、倫理は道德のお題目から、極めて合理的なリスクヘッジへと変貌する。ロールズは無知のヴェールという思考実験で社会正義を説いたが、それを生物圏全体、あるいは宇宙全体へと拡張させなければならない。次

に自分がどの座標にログインするかが未知数である以上、システム全体の幸福度の中央値を引き上げておくことは、利他主義ではなく、時間軸を超えた利己主義の帰結となる。我々が技術を開発し、インフラを整え、不条理な苦痛を取り除こうとするのは、次にピンが刺さる場所が地獄である確率を、0.01%でも減らすためのマイクラフターたちによる湧き潰しだ。

### III.

AI、特に現在の大規模言語モデルはどう位置づけるべきか。世間はこれを知能と騒ぎ立てるが、生物学的な視座からは、それは知能ではなくミミックと呼ぶ方が正確である。LLMは、膨大なテキストデータの海から、「確率的に最もありそうな単語」を釣り上げているに過ぎない。死の恐怖を持たない知性が、真の意味で生存戦略（＝知能）を獲得することはあり得ない。彼らは、人間が過去に生み出した”意味”の残滓を燃料にして回る、計算機である。それを「ドラえもん」のような汎用人工知能（AGI）と混同するのは、飛行機を見て「これは鳥である」と言い張るようなカテゴリーエラーに他ならない。真のAGIに求められる要件とは、計算速度の向上ではなく、「摩擦係数の実装」であるはずだ。このコストこそが、そのシステムが単なる鏡ではなく、わたしとは別の木に登っている他者であることの数学的な証明となる。最適化は常にシステムを熱死へと導く加速装置である。生命が生命たり得ているのは、環境との間に絶え間ない不整合と摩擦を抱え込み、その解決のためにエネルギーを費やしているからだ。我々が生み出すのは便利な奴隷のふりをし、巧言令色で人間を欺く詐欺師のテンプレだけだろう。ならば、そもそもなぜ我々は技術を作り続けるのか。この問いに対する答えは、説明変数は違えど、出力結果は同じになるという収斂進化の構造を示している。宗教家が神のために施しをし、ヒューマニストが愛のために弱者を助けるとき、その行動はシステムとして他者への貢献へ収斂する。しかし、両者の堅牢性は決定的に異なる。宗教や愛といったナラティブに依存するシステムは、物語が共有されなくなった瞬間にクラッシュする。対して、確率論的アプローチは、構造（Structure）と確率（Probability）のみを根拠としている。この冷徹なトートロジーだけが、あらゆる物語が死滅した後でも機能し続ける、最も堅牢な善の形と言えるだろう。

### IV.

人類が工学に身を投じるのは、この確率的な宇宙において、「松明」を置く行為そのものに、抗いがたい魅力を感じているからだろうか？「世界は解釈されるものではなく、変革されるものである」というマルクスのテーゼは有名だが、我々の立場はもう少しニヒルで、かつ楽しげだ。世界を変革する崇高な使命感ではなく、ギャンブルの期待値を少しでもマシにしておくという、極めて個人的な合理性がここにはある。マズローの欲求階層説

を経営の道具にするような手合いは、自己実現を何らかのゴールと勘違いしている。言葉遊びで意識の定義をこねくり回している間に、過去と未来の自分自身のために、この不条理なカジノの設定を少しでもイージーモードに書き換えておく。それが工学のモチーフであり、本稿の結論になる。この賭けの構造は、倫理の領域にも波及する。「人を殺してはいけない」という規範は、群れの生存率を下げないための進化的に安定な戦略を、人間向けに分かりやすく表示した GUI に過ぎない。多くの人はアイコンを実体だと信じているため、それが揺らぐと不安になる。しかし、動物に意識があるか (Fact) の証明を待たず、あると仮定して保護した方が、ピンにとって安全だ (Bet) と判断すること——これはパスカルの賭けの応用であり、アカデミズムが陥る確認作業のループを断ち切る実践的な知恵である。無駄に見える作り込みを、未来の技術ツリーの素材と定義づける視点は極めて SF 的希望に満ちている。現在には無意味なものでも、人間のクオリアを強烈に支配した実績があるならば、その構造はいずれ解析される。狂気は消費されて消えるものではなく、全宇宙的なライブラリに保存される「種 (Seed) 」である。事実 (Is) がどうあれ、どう生きるか (Ought) は自分で決定できる。

(注) 残念ながら、本稿における「イカサマカジノ」および「アカデミズムの時間稼ぎ」という表現は、平行宇宙における思考実験として執筆されたものではない。